

ピアノ基礎技法 ～初心者のためのバイエルピアノ教則本～

The Basic Piano Techniques : BEYER For Beginner

(2008年3月31日受理)

大 山 佐知子

Sachiko Oyama

Key words : 鍵盤と指の一体化, スラー, 手首とスラー, 拍子感覚, バランス感覚

“Bayer” is one of the most famous textbooks used in Japan. We will show how to use it effectively, but carefully.

バイエルピアノ教則本は、日本で良く使われている教材である。ここでは、どのように注意して使用することが効果的かを考察する。

はじめに

技術の習得は、どんな分野でも最初が肝心である。なぜなら、人の癖はなくて七癖といわれる上に、物理的に有効でない癖が最初の段階でついたものは、第1印象的に潜在意識に入り、無意識に蓄積されてしまうことになるので、意識しなおすことが既に困難になり、直りにくいのである。

ピアノの技術は、動きと音が一体化して初めて一音の美しい音を生むことが出来る。しかし、動きを意識しながら音を出すという行為は、人一倍客観的な耳を持たなくては不可能なものである。残念ながら、初心者の（ピアノは、ほとんど幼児期に始める方が良いとされる）段階では、自主的にこの聞く耳を持つことができる人は、100人に一人もいないであろう。私自身もかつて全く意識のないまま、日々訓練を続けていた一人である。

初心者の段階で、特に最初の一音につながる指導は、細心の注意を払って行うべきである。出来るだけ自然にピアノの鍵盤に、接することが出来るように指導者は、新たな癖の発生を即座に見抜き、矯正しながら技術を積み上げるよう補助する必要がある。

バイエル教則本は、初心者の段階を注意深く進めながら、ピアノの鍵盤と指の一体化を確実にし、あらゆる楽曲に通じる歌う要素もスラーで考えさせ、ピアノ全体の響きのバランスも連弾で体験するように構成されたものである。今回は、この教則本の多くの利点を考察する。

〈バイエル教則本の全体構成とその利点〉

この教則本の全体の目的は、初心者がこの一冊を習得すれば、楽譜をスムーズに読むことができるようになるということであろう。

“スムーズに読む”ということは、簡単そうで実は難しい。なぜなら、楽譜を美しく自然に演奏することは、無意識に偶然できることはあっても、意識して何度でも確実にを行うことは、力んでしまいできにくくなるからである。

この教則本では、楽譜の読み方から、音符、休符に始まり、スラー、拍子記号、変化記号、強弱記号、速度記号、変奏曲形式、連弾形式を取り上げている。この利点は、初心者の楽譜でありながら、ピアノの大曲に通じる素材が体験できるということである。右手、左手の片手ずつの最初の段階で、約30曲指導者との連弾によりピア

ノの全体の響きを聞く体験を行う。全体では、104曲中、約40曲が連弾により行うよう構成されている。これは、単純なメロディーを弾く段階から、指導者の弾くバスのハーモニーとのバランス感覚を育てることになり、聞く耳を育てる効果がある。また、アンサンブルをする経験もしていることになり、合わせる上で重要な拍子感を意識する訓練にもなる。

ピアノは、左右の手で違うことを行い、一人でメロディーを演奏し自分で伴奏も同時に行うという、大譜表を常に読む必要がある楽器である。この意識を片手の段階からピアノ全体の響きを聞きながら行うことは、潜在意識の中に、良い意味でバランス感覚を蓄積することにつながる。指導者には、学習者のメロディーの音に応じて、最良と思われるバランスで伴奏付けをし、聞く耳を育てることに注意を払うことが要求される。

連弾で、耳のバランスが少し出来たころとみなし、12番から、両手のバランスを自分で訓練する段階に入る。同時に両手で“読む”訓練をするのに、音の範囲を限定している。更に高音部譜表に限定し、32番で加線が出てきた段階で左右同じメロディーになるが、連弾を伴い常にバランス感覚を養えるよう、43番までメロディーだけの練習は避けて作られている。これにより、学習者は、単純に飽きることを避けながら、加線の譜読みをスムーズに身に付けられる。

次に44番で8分音符が初めて出てくる段階となる。1拍を2倍、3倍に長く伸ばす拍子感の方向から、1拍の中を細かく分ける方向に変わる。ここで、連弾により指導者の拍子感に誘導されながら、リズムの変化を体験する。自分では、まっすぐに感じているつもりでもリズムが変わると急に感覚が麻痺してテンポを見失いがちであるが、これも潜在意識に入っていく練習である。メトロノームに合わせるよりは、バランス感覚を維持したままリズムだけを体験する訓練である。

8分音符に慣れた段階で、8分の6拍子が52番で出てくる。また、この段階で、強弱記号、表現記号が続々と登場する。これは、表情をつける訓練の始まりである。

しかし、依然として5指は、ほとんど定位置で弾くように作られており、ポジションが変わっても一箇所8度のオクターブ以内の範囲で移動する程度になっている。

この訓練は、注目すべきで、初心者が鍵盤を見ないで、

手探りで弾ける範囲は、幼児では、7度でも広い跳躍の始まりになるので、8度を使うことを慎重にしているのは、大切なことなのである。これにより、鍵盤の距離を慎重に指だけで測る感覚を育てることにつながるのである。

この段階では、楽譜を見ながら演奏する時、ほとんど鍵盤を見ないで弾けるようになっていくことが望ましい。これが、それまでの技術をスムーズに習得しているかどうかの目安になるであろう。それに比べ、何度も楽譜と鍵盤とを見直し、指の位置を見なければ弾けないという状態では、先に進むことを考え直した方がよい。この癖は、とても直しにくいので、この段階で取れるよう注意したいものである。

61番から、低音部譜表も出てくる。ひとりで、ピアノという楽器の響きを作る段階に入る。この先は、それまでの習得のレベルにより、スムーズに出来るかどうかは、はっきりと分かれることになる。これ以降、指くぐし、オクターブの音階、2重音、持続音とピアノの技術を一挙に習得する段階に入るので、50番までの総合力が9割以上実を結んでいないと大変苦勞することになるのである。

順調に訓練を蓄積できれば、この1冊を終えれば、16分音符の譜読みも楽にこなせるようになっていく。ということは、専門家の基礎教本であるハノン教則本（最初から16分音符だけを使う状態で60番まで延々と作られている）にも進むことが出来る可能性があるということである。

バイエルの全体の構成は、専門家に通じる教本のエキスだけを抽出した凝縮版と言える。ドリルをこなすように譜読みをするだけではない、あらゆる要素を含んでいるものなのである。

指導者は、注意深く進める中で、学習者の指の使い方を無駄なくピアノと一体化させるように常に心がけることが必要である。そうすることで、この教本の専門家に通じる技術習得ができる利点を引き出すことが出来るのである。

〈“一曲”であるという意識〉

1番は、テーマ、Tempo Moderato、レガートで、拍子を数えながら右手で弾く練習である。

この表示が単に音を読むだけの目的でないことを十分に示している。出来るだけ美しい音で曲想を考えて弾いて欲しい願いが、この表示にこめられている。拍子感を持ち、連弾の指導者の伴奏の響きの上で、美しく歌えるように訓練するのが目的である。

右手で弾く。その時指番号に注意して弾く。更に、拍子を数えて口で言いなさいと指示があり、伴奏の響きも聞いて弾く。4つの注意を一気に訓練しているのである。

この訓練は、このまま無意識にバランス感覚につながっているものである。この訓練は、ピアニストになくはならない最初の感覚であり、ピアノの魅力を最大限に感じながら訓練する最良の方法と思われる。

〈スラーの意味〉

1番テーマが与えられた後、バリエーションが12曲、連弾の伴奏を聞きながらの形で訓練される。

リズムの変化によるバリエーションは、さっそくスラーの表示変化も加えられ、つまり、さまざまな歌い方をスラーで表し、どのようにレガートで演奏するかを訓練し始める。

レガート奏法は、ピアノの技術の中でも一番困難な部分であり、はっきりと出来た感覚のないまま練習を積んで、力加減を間違えてしまいやすい奏法である。本来なら、脱力も理解したうえでやっとなら理解できる課題の部分であるが、音を出す第一歩から課しているところがすばらしいと言える。

ピアノの欠点の同音連打で音が切れるところは、そのままスラーをつけないで、違う音に移動する2音は、スラーで奏することから始めている点も実に自然である。

バリエーション1は、ドからレに進む時、スラーの表示がなくても、普通は10人が10人続けて弾いてしまう可能性がある奏法を、はっきりとスラーで示し意識化しているところに意味がある。無意識に音を続けるのと2音をつなげるスラーを意識して続けるのでは、やはり楽譜を読む上で、後になって差が出るものなのである。これは、作曲家が、スラーをつける意味を考えさせる習慣にもなる。出版者や編集者によって、変更の多いスラーは、本来、作曲家の自筆原稿を見直して考慮すべきなのであるが変更しても自然かどうか見抜くことは難しい。しかし、初心者の段階から2音のスラーの意味を考え、意識

して歌う訓練をすることで、常に作曲家の意図を計る姿勢を身につけていることになり、自然な歌い方が出来るようになる可能性が広がるのである。

そう考えると、このたった一つのスラーを美しく歌うことは、とても重要な第一歩になるのである。

〈短いスラー、長いスラーの奏法〉

あらゆる曲を弾きこなすのに、スラーを美しく自然に歌うことは、何よりも大切である。

スラーは、2音をなめらかにつなぐことから始まる。手首を下ろすのと同時に、最初の音を打鍵し、手首を上げるのと同時に2番目の音を打鍵する。この動作をなくして2音を弾くと、固い音になり、1音1音が分裂して聞こえるのである。

ここで注意をしなければいけないことがある。

手首を下ろした時、肩までの脱力をして、手首から指先は腕の重さをぶらさげられるように、関節に力を入れていることを意識しなければいけない。また、手首を上げた時、肩までの脱力がなくなり、手首から先だけをぶら下げて脱力していることを意識しなければならない。

これが、脱力の意識であり、初心者にはとても難しい。偶然、良い状態で音を出せることもあるが、指導者が常にその状態であるかどうかを見抜き、違う場合は、即座に指摘し、意識しなおすことを促す必要がある。

少しずつ注意深く技術を身に付けることが、遠回りなようで近道である。

次に、長いスラーについて考える。つまり、小節を超えてついている長いスラーは、どのように奏するべきかを考える。

2音を弾く時の原則、手首を下ろし、手首を上げるという動作でスラーを弾き始め、弾き終わることに変わりはない。しかし、その間が長くなるほど、重みを感じているはずの手首が固くなりやすい。これを防ぐのに、拍子感を感じる事が大切である。また、各小節の最後の拍では、手首の力を緩め、次の小節の1拍めで腕の重みを意識しなおすことが出来ると良い。このとき、長いスラーの重心を考えることも忘れないでおきたい。一番歌う場所がはっきりしていれば、手首を緩めながらも一番重みをかけるところに向かって、歌うための力加減を準備できるのである。

〈スラーの終わりが次のスラーに重なる場合〉

特殊な場合であるが、スラーの最後の音が次のスラーの最初の音である場合もある。歌で言えば別の人が前の歌に重ねて歌いだすという場面である。これを一人で行う場合は、どうしたら良いか。この場合は、前のフレーズは、終わりになり音が消えていく状態で、後から出るフレーズは、始まるので音ははっきり出始める状態と考えると判断しやすい。つまり、始まる音として理解した方が良いのである。

手首は、後のフレーズに合わせて準備するのが良い。前のフレーズの最後の音で手首を上げるのを止め、さいごから2番目の音で手首をあげ、次のフレーズの始めの音のために準備する。前のフレーズとしては、最後の音で手首を新たに下げることになるが、既にその音から次のフレーズが始まっているので、この動きが必要なのである。

こうして、スラーとスラーをつなげていくと切れ目のない歌い方ができる。

〈休符の意識〉

次に、休符の意識の仕方を考える。休符を意識して音をどのような長さで切るかは、とてもたいせつなことである。休符の切り方で、曲の感じが柔らかくなったり、整然としたりするものである。

まずは、ソルフェージュに近い感覚で、音符の長さを守った後、休符の拍できちんと切ることができるのが良い。この時、鍵盤が元に戻ったところで切るということが出来れば良い。鍵盤から指が離れないよう音が切れても触っていられることが大切である。これにより、指は、常に次の音のためにポジションを維持していることになるからである。

鍵盤から指が離れるときもある。それは、曲が終わるときである。次に進む必要がなくなって、初めて完全に指が鍵盤から離れて良いのである。

〈曲想をつける意識〉

“バイエル”の後半、60番程度から、強弱記号やクレシェンドなどが多く出てくる。

これは、一曲としての構成力を更に身につける練習をしている。

それまでは、フレーズを美しく歌うことを目的としていたが、更に曲想を意識し、フレーズの強弱の幅も広がっている。これにより、劇的に一曲が変化する。

この段階でクレシェンドを行うために、技術としてはっきりと変えなければならないことがある。

手首を下ろして腕を脱力してしっかり音を出し、手首を上げて腕を持ち上げ手首から先を脱力していたのを、そのまま肘から押してクレシェンドをする技術である。

これは、側でみても同じ動作に見えるのに、音がだんだん小さくなる場合と、だんだん大きくなる場合にわかれ、このように出来るのは、腕の中の力加減をコントロール出来るかどうかにかかっている。脱力も出来ながら、力の変化をさせなければ出来ないので大変難しい技術になる。

前半の練習で、しっかり脱力も意識しながら進んでおかないと、このような技術が必要になる後半では、ますます混乱を起し、力加減がわからなくなりやすいのである。

指導者は、後半に入る前にくれぐれも脱力を意識させながらフレーズを歌いきるということを前半で確実に身に付けさせるよう、注意深く見守ることが必要なのである。

お わ り に

バイエルピアノ教則本は、日本でしか有名でないとも言われているが、私は、優れた教則本であると思う。

日本でよく使われる中でも、実は、意見が賛否両論に分かれている。否定的な意見では、この教本が求める内容では、進度が遅いのではないかということや、同じ練習の繰り返しで音楽的でないということである。肯定的な意見では、基礎を固めるのに必要なことが盛り込まれているということである。

私は、後者に大賛成である。基礎的なことは、幼児なら身につけるのに約3年かかるかもしれない。これは、無意識に身に付けさせるにはそのくらいかかるかもしれないということである。幼児から学び始めるピアノの技術の習得は、幼児に確実に意識をさせることがまず困難である。小学校高学年以上になれば自己の確立ができ、客観的な理解力も高まっているので、意識して自分で習

得を確認することも可能であろう。この年代なら、3ヶ月から1年くらいで意識的に技術習得が出来る人もいる。しかし、基礎を身につけることは、最初に用心深くすることが大切である。目的を見失い、急いだためについた癖は、もしかしたら一生ついてしまう無意識の癖になるのである。急ぐべきではない。

バイエルの教材の目的は、ドリル式にこなすのではない。これは細心の注意を払って全ての基礎を身に付ける教材である。指導者もその目的を考え、細心の注意をしながら誘導していく必要がある。そうすることで、この教材は、後に体験するあらゆる技術の基礎を構築してくれると考える。

ただし、幼児の頃からする場合、習得の時間を要するので、他の教材を併用することが必要であろう。つまり、ソルフェージュトレーニングや、イメージトレーニングのできる曲を行ったり、またバッハの教材も行いながら、バイエルで習得した基礎の応用力も確認していく必要があると思われる。

もう一度言う。決して基礎の習得を急いではいけない。年齢差や、個人差はあるが、確実に意識して出来るまで行う以外、技術の習得はあり得ないのである。その意味で、バイエル教則本は、全てに通じる基礎を意識的に学べるすばらしい教本の一つであると言える。

参 考 文 献

バイエルピアノ教則本（標準版）全音楽譜出版社

